

都島だより

発行責任者

西村 功

〒241-0002
横浜市旭区上白根2-35-5
TEL 045-953-4726



(社)浪速工業会
関東支部会報

2010年(平成22年)11月 第42号

事務局 馬江 治喜

〒234-0056
横浜市港南区野庭町696-6
TEL045-841-8885
E-mail nanium@c3-net.ne.jp

題字デザイン 岡田宏三

NEWS42号

関東支部・現在会員数 ◆ 合計557名

◆M・機械113、ME・機械電気25名◆A・建築99名◆E・電気・電子工学178名◆C・土木・都市工学53名◆C I・工業化学・理数60名◆L・普通11名◆工専18名

2011.1.21(金)

関東浪速工業会

新宿住友ビル47階



今年も東京住友クラブ

にて開催

いたします。

平成22年度
総会のご案内

関東浪速工業会、今年度の総会を左記の通り開催いたします。ご多忙中のことと思いますが、万障お繰り合わせの上ぜひご参加ください。

●日時 平成23年1月21日(金) 18時〜20時30分

●場所 東京住友クラブ

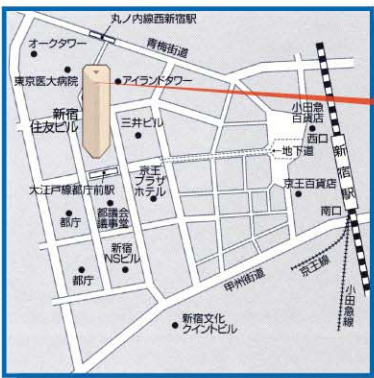
新宿区西新宿2・6・1 新宿住友ビル47階

TEL・03・3344・6285

●親睦会費 8,000円(女性会員は4,000円)
平成年度卒業会員は無料!

●同封の返信はがきに出欠をご記入の上必ず投函して下さい。

申込締切 平成23年1月10日



交通のご案内
JR(新宿駅西口)より 徒歩8分
東京メトロ丸ノ内線[西新宿駅]より 徒歩3分
都営地下鉄大江戸線[都庁前駅] 直上



昨年度総会での各科集合写真

是非ご参加ください

昨年度の総会出席者

来賓	溝手理事長 栗根学校長			
機械科	M14松原 滋	M26上田英雄	M34石川芳夫	M36西村 功
機械電気科	M42前田範行	M42山口忠雄	ME40松本良治	
8名	清水一三雄先生			
建築科	A25西阪 勲	A27清井英治	A28酒井 保	A29森 正信
普通科	A37森 芳信	A37越田 勝	A38岩井浩一	A44水守恵子
15名	A46三澤龍夫	A46柚木寿雄	A57信原利行	A57中谷卓司
	A57西井久人	L29小川貴惟	L29野沢光久	
電気科	E29小林孝栄	E35田中 浩	E35芳仲 宏	E36赤尾仁史
8名	E36安部昭俊	E36笹治博司	E36馬江治喜	E36竹村繁幸
土木科	C18/9大倉 馨	C20榎本嘉信	C33明見和彦	C33松本信行
4名				
工業化学科	CI32佐々江延宣	CI33西村一男	CI34柴田孝次	CI34田中忠三郎
7名	CI39藤田 忠	CI40菅家互通	CI38岩井 誠(本部副理事)	

参加者42名+来賓2名 合計44名でした



昨年度総会でのスナップ写真

東京電力 川崎火力発電所 見学会

M28 畑明

平成22年7月9日・川崎発電所を15人で見学訪問しました。当所は昭和36年に運転開始し、旧設備を撤去後、新たに新鋭の設備を建設中で現在3設備で公称150万KWを送電中。国内でも、屈指の設備を擁しています。ガスタービン・蒸気タービン発電機のタンデムの構成です。見学の諸兄は技術の専門家であるだけに、ご案内いただいた職員の方への質問が飛び交い、有意義でした。小生が現場で高速回転中の機器に、外から手をふれてみると、ほとんど振動らしきものが感じられず、すばらしい設備と体感できました。

中央運転監視室は、広々としていて、職員は数人でコントロールしている由。昔のように、やたらに機器の運転のための開閉器、ハンドル、など機械的な物は一切なく。すべてTV画面、コンピュータ制御化されていました。排熱回収ボイラ設備は、巨大なものです。長崎から海上輸送し、そのまま、この発電所に設置された由。海浜に立地した理由がわかります。また施設はエコにも配慮されているようです。最終的には、平成29年にすべての設備が完成し、342万KWの能力となります。見学終了後、川崎駅前の22階にある飲み屋にて、一献酌み交わし、諸兄と交流しました。小生は初めての参加で、楽しく過ごせました。また思う存分大阪弁が使え、愉快でした。東京電力の見学をご案内頂いた方及びお世話して頂いた方々に御礼申し上げます。



H22.7.9 川崎火力発電所



見学会集合写真



大谷資料館 超巨大地空間の体験

A45 渡辺 隆

平成22年9月4日(土)に関東青葦会主催の大谷資料館・超巨大地下空間の体験に参加しました。残暑厳しい日々(当日最高気温35℃)が続く中ではありましたが、参加者17名(青葦会の方が11名、機械、電気、工業化学卒の方が6名)が、JR宇都宮駅に午後1時に集合し、30分ほどバスに揺られて宇都宮の北西部に位置する大谷景観公園のバス停に到着し、徒歩にて大谷資料館・超巨大地下空間に到着しました。地下の採掘跡は気温13℃と涼しく、ひんやりとしていて水滴が垂れ、歴史を感じさせる空間でした。結婚式、コンサート会場としても利用されているとの事でした。見学会の後は宇都宮駅前の餃子館にて懇親会となり皆さんと楽しい交流の場となりました。幹事の方々段取り有難うございました。



大谷資料館前



宇都宮駅前の餃子店

青葦会

陶芸会の報告

A57 信原 利行



毎年恒例の関東青葦会主催の陶芸会が平成22年10月2日(土) A46卒の陶芸家の柚木寿雄氏の国立自遊工房にて開催されました。今回は他科の方2名の参加を含めても5人の参加者で例年に比べて少なめでしたが、いざ始まると皆さん制作に没頭し、日常を忘れる貴重な時間を過ごすことができました。陶芸

会終了後は懇親会となり、作品制作でお忙しい柚木氏も加わり、国立駅前の居酒屋にて大盛り上がりで楽しい会でした。制作した作品は12月頃に焼き上がりとなるので、自遊工房を再度訪れ作品を受け取りに行きます。その日はいつも忘年会となるので、それも毎年の私の楽しみです。



陶芸会・国立自遊工房

秋のゴルフコンペの報告

E36 竹村 繁幸

平成22年10月14日(木)旧軽井沢ゴルフクラブにて、爽やかな秋空のもと最高のロケーションの旧軽井沢で木村先輩(C20)のご好意により、一泊ゴルフを実施しました。前夜は木村先輩の別荘でゴルフ談義や麻雀でモチベーションを上げ、翌朝、大正8年開場の旧軽井沢ゴルフクラブで初参加の太田さん(M34)を含め9名のラウンドとなりました。優勝は今迄の練習の成果を発揮された菅家さん(CI40)がNET74で、2位はオナーの木村先輩でベストグロス賞(89)と共に獲得されました。二日間にわたり楽しいゴルフライフとなりました。



旧軽井沢ゴルフクラブ



コンペ表彰式

桂米左独演会

「こんな落語もあるのだ！」 桂米左独演会を聞いて

M36 西村 功

平成22年10月31日浅草見番にて恒例の桂米左(A59)独演会が開催されました。当日は台風14号の通り過ぎた後の秋の気配が戻ってきた日で、当会から11名が参加しました。あと1日ずれておればどうなっていたやらという心配をよそに無事開演となりました。さて、本日の演目は2席でいずれも上方落語の大御所であり桂米左の大師匠である四代目桂米團治を意識した上方落語の古典「不動坊」と「弱法師(よろぼし)」を米團治から継承された古い形のままこれぞ上方落語という内容です。「弱法師」は親子の人情味豊かな話ですが、なんと笑いの一切ないという珍しい一席で、見番という落ち着いた座席とあいまり桂米左の表現力豊かな語り部に聞き入り、しばしこんな落語もあるもんだと貴重な体験をした独演会でありました。

桂米左独演会
弱法師、不動坊 桂米左 / 春風亭柳朝 / 桂 佐ん吉

2010年10月31日 浅草見番

2010年10月31日(日) 14:00開演 / 13:30開場
浅草見番 観席・自由席
1席 前橋区立浅草文化センター 浅草見番ホール
(〒127-0034 東京都葛飾区浅草橋1-1-1)
TEL:03-5622-1111 FAX:03-5622-1112
www.hakozemi.com www.chuwa.com



ピースボート旅行記

CI 39 馬場 義甫



PEACE BOAT 3、寄港地

横浜を出港し4日最初の寄港地中国のアモイに朝入港する。入港する前日には必ず寄港地説明会があり寄港地の天気情報、治安状況、交通手段、主な観光案内、必要な手荷物の案内等があり、オプショナルコースによっては分科会があり、更に詳しい説明がなされる。最初の寄港地アモイの船上から見る景色は、高層ビルが立ち並び想像との違いに驚かされる。現地の人々が太鼓をたたきながら、歓迎セレモニーで出迎えてくれる。自由行動の手引きによると、治安は比較的良好、自由行動のしやすい寄港地の一つであるが、最初の寄港地なので、オプショナルツアー「アモイ観光」を選んだ。アモイ市内を一望できるコロンス島の日光岩や、市内のシンボリック的存在である南普陀寺などを巡るアモイ観光のスタンダードコース。昼食は福建省自慢の海鮮料理であったが、さほど美味しいものではなかった。その他にアモイでのオプショナルツアーとして、A：家庭でのお昼ごはん交流。B：カンボジア地雷問題検証ツアー（これはオランダランドツアー：船を一時離脱するコース）飛行機でカンボジアに行き地雷の爆破体験などをして、次の寄港地シンガポールで合流するコース。C：アモイ観光。D：ゆったりアモイ。E：世界遺産「福建土楼」へ。F：九寨溝・黄龍をゆく6日間（これもオーバerlandツアーで5月2日にシンガポールで合流）などのコースが用意されている。これらのコースを取らずに自由行動にして、マイペースで楽しみ帰船リミットまでに船


に帰ればよいのである。船は通常朝入港し一日の観光等を終えて、夜間に次の寄港地を目指し出港する。二番目の寄港地シンガポールには、五月二日の朝ハーバーフロントセンターに入港。東京23区と同じくらい面積の小さい国で、治安も良いので自由行動。同室のIさんも自由行動を選んでいたので、二人で散策を楽しむことにした。Iさんは以前仕事の関係でシンガポールに来たことがあるとのことと安心して同行した。噂のマライオンにはがっかりさせられたが、のんびりと市内を観光した。三番目の寄港地モルディブのマーレは小さな島で、大型船が停泊出来る港がないので、沖合に停泊して通船(テンダーボート)で上陸して、美しい島での観光などを楽しみにしていた。ところがあと二日ほどでマーレに着くころになって、マーレにはどうやらいけないような噂が流れた。船はマーレ寄港の後地中海に向けて航行する予定で、海賊が暗躍しているソマリア沖を通過しなければならぬ。そして乗船客全員にマーレに関する説明会があるので、ブロードウェイショールームに集まるようアナウンスが流れた。説明会によると、昨日大型客船がソマリア沖で海賊の襲撃を受けたらしく、外務省から本船も危険が予想されるので、ソマリア海域で護衛している自衛隊の艦船下に入るよう指示されたとのこと。付近を航海している日本船籍の船が、期日を設定して艦船の下に集結しなければならぬ。集結するにはマーレに寄港している時間的余裕がないので、従って残念ながらマーレ寄港はキャンセルさせて欲しいとの説明であった。当然マーレを楽しむにしていた人々からは、ブーイングの言葉が発せられ、海賊と戦う強硬な意見も出たが、結

局自分たちの安全を自衛隊に委ねることになった。大海原を航海している時はほとんど他の船とは遭遇しないが、狭い地中海近くになるとあちこち船影が見られるようになった。デッキに出てみると遠方に自衛艦らしきものが見え、大型貨物船、コンテナ船、タンカーなどが隊列を作りつつ航海している。ソマリア沖では自衛艦に前後を護衛された日本船籍の隊列が見られた。このことがあつてか船内では、自衛隊特に憲法9条そしてソマリア沖に派遣される経緯や装備についての討論会があつた。4番目の寄港地ヨルダンのアカバには2日停泊した。国土の80%が砂漠や荒野で、パレスチナ難民キャンプ、ペトラ遺跡とワディラム、死海での浮遊体験などのコースがある。私は映画「アラビアのローレンス」のイメージそのもののワディラムを、駱駝ならぬ日本では廃車になるようなポンコツ四輪駆動車で荒野をかけた。翌日は死海での「浮遊体験」塩分濃度が海水の9倍もあり、沈もうとしても浮いてしまう不思議な感覚を楽しんだ。


地球一周の船旅



ワディラム



アモイ・コロンス島



シンガポール

「次号に続く」

一泊懇親会の報告

H22. 11. 14 伊豆高原

E 36 馬江 治喜

平成22年11月14日(日)15日(月)、伊豆高原クラブにて一泊懇親会が開催されました。最高齢は86歳の方、また遠くは仙台・前橋から参加して頂いた方々を含めて総勢7名と多少寂しい感がありましたが、和やかな雰囲気懇親会となりました。まずは乾杯、豪華な舟盛を肴に会話も弾み賑やかな宴会となりました。二次会はカラオケで夜の更けるまで大いに盛り上がりました。翌日は城ヶ崎灯台からピクニックコースを散策し、伊豆高原駅で昼食の後またの再会を誓い合つて散会となりました。天候にも恵まれ大変楽しい懇親会でした。今回の一泊懇親会は、西村会長のお世話により実現しました。西村会長、有難う御座いました。

参加者は清水一三雄、清井英治、明見和彦、田中浩、西村功、菅家亘通、馬江の計7名でした。(敬称略)



西の果ての島 「アイルランド旅情」



A27 田中 瑛也



古代人の抱いていた宇宙観は、中国古代の文献に記されている様に、天は円形、地は方形と洋の東西を問わず共通していた。この発想に基づけば、西の果てアイルランドは、まさにイギリスの作家ジェームス・ジョイスが彼の著書「ユリシーズ」で詠った「日没の国だよ。南東に沈む自治の太陽わが祖国。お休み。」の章句があてはまる。ユーラシア大陸を挟んで日本と対極をなす位置に、存在するこの島国は、ヨーロッパの辺地から絶えずヨーロッパの中心を見定め、歴史の真実を追い求めてきた自負心を人々は、持ち続けている。この国に西欧文明の根幹をなすキリスト教は3世紀に聖人パトリックによってもたされた。中東から地中海沿岸は、人類が進歩するに従って山林を伐採し田畑を造り農耕を営む。加えて宮殿の造営等に見られる石の建築は、石を加工する為に必要とする鑿、その鑿の資材となる鉄、鉄を製造する燃料として膨大な木材資源が、乱伐された。中東の神話「ギルガメッシュ」にも登場する森の守護動物蛇は、行き場を失いギリシャ神話にメデューサとして現れ、彼女に髪は蛇のからんだ容姿として、人々を恨み、悩みを与える。寓意に満ちたこの伝説を脱却してキリスト教の忌み嫌う蛇をアイルランドから追放した聖人として住民に崇められた。アイルランドの風景は、一望するにまるで緑の絨毯が敷かれた平地、随所に点在する高い丘陵、湖沼と野山をゴルフ場と視界が

捉える。もともと聖人パトリックがアイルランドにキリスト教布教の為に、足を踏み入れたのは432年であり、アイルランドの山林が伐採され、自然が大きく破壊されるのは、アングロ・ノルマン人の侵入を受けた1166年以降であり、さらに追い打ちをかけて破壊されたのは1649年イングランドの宰相クロムウェルによるアイルランド征服であり、史実は大きく前後するがいずれにせよアイルランドの地には森は見当たらない。ところで古来から日本人は森に霊ありとした木霊信仰転じて言霊信仰を持つていた。アイルランドでは、森を追われた霊は無き住処を求めて空中を彷徨った。この空中を彷徨う信仰は、ケルト民族以前の先住民から受け継がれたアニミズム信仰と合体し更に、聖人パトリックは巧みに妖精信仰を、キリスト教の三位一体信仰、父と子と聖霊と重ねて取り入れキリスト教の神髄として信念を持って布教した。ちなみにこの教えを説く折に野に茂る三つ葉のクローバー(シャムロック)をつみ取り信者に三位一体説を説いたといわれる。キリスト教が伝わる以前には、ケルト民族が当地に安住をしていたが、更に歴史を遡り紀元前3000年頃に生活していた人々は、巨石古墳を築き太陽神を信仰の対象としていた。その頭は、村や町に建つキリスト教教会の敷地の一角に建つケルト十字架は、太陽を頭す円をキリストのシンボルである十字で区切る。ここにまた伝統としての先住民の信仰を宗教の布教に取り入れた先人の知恵の深さに驚嘆する。(写真1) ところで聖人パトリックの功績を讃えて建立された聖堂は、首都ダブリンの中心に初期ゴシック・アングロ様式で威厳を持って聳える。幾多の紆余曲折を経て今日は、アイルランド・プロテスタントの教会として存続している。(写真2・3)

地の果てアイルランドの人々は、海の彼方に浄土があると頑なに信じた。航海術の発達による新大陸発見とあの世ならぬこの世での新大陸へと、アイルランドの人々は、多数のイングランドのピューリタンに混じり、少数のカトリック教徒としてアメリカに移住した。その子孫の中には、アメリカ大統領として世界を動かしたレーガン、ケネディの名も見られる。他方当地に留まりこのアイルランドの自然をこよなく愛した人々もいる。19世紀の詩人W・B・ヤーツもそれらの人々の一人だが、彼が詠んだ詩「輪廻」に自然状況描写の一端が伺える。(写真4)

冬は我等春を呼ばはり、春日には夏を呼ぶなる、端垣に鳥なくころは 言うなめり冬いとよしと、春ついにめぐり来ざれば、その後はよき時ぞなきー はた知らず我等の命 死をしたい落ちいぬすがた。(イエーツ詩抄 山宮充訳 岩波文庫版)

春夏秋冬の景観は、我が国土との異なりはあっても(森林と草原)世の移ろいは同じである。旅先で携えていたこの詩を読み、ふと我が国平安期の歌人西行の「秋来ぬと」の和歌を思い出し最西端の国アイルランドの旅情を一層豊かにした。



写真1



写真2



訃報

恩師	大河原義徳氏	平成22年6月2日
E15年卒	西岡 英雄氏	平成21年11月1日
A 9年卒	近内 義雄氏	平成22年4月8日
A27年卒	倉橋 凡夫氏	平成21年11月21日
M17年卒	横内 武男氏	平成22年10月28日

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

次号のMニュースは平成23年5月発行予定です。

皆様の原稿を
お待ちしております！
事務局までお送りください。



EU圏シリーズ (3回)

第1回東端	フィンランド (Mニュース39号掲載済)
第2回西端	アイルランド (今回)
第3回南端	スペイン (今後掲載予定)



写真3



写真4